Mursheda Begum 氏博士学位請求論文審査報告書

申請者　**Mursheda Begum**

論文題目　**Bangladesh's Mortality Levels and Patterns in the 1970s: Famine, Cohort Survivorship and Gender Inequality**

１．本論文の構成と主題

Mursheda Begum 氏の論文は、バングラデシュにおける死亡率の水準とパターンがどのように変化してきたかという歴史的な問題を扱っている。とくに、国民がパキスタンからの分離独立戦争や飢饉・疫病に苦しめられた 1970 年代を対象とする。ここで「水準」とは、平均余命や乳児死亡率といった死亡確率を表す尺度の平均水準を意味し、「パターン」とは、それら尺度のレベルとは独立の年齢別および性別のプロファイルをそれぞれ指す。後者を具体的にいえば、気候風土に根ざした疾病パターンとの関連、もう一つは社会における女性の地位に根ざしたジェンダー間不平等と関連する問題となる。すなわち、死亡率のレベルは長期的かつ全体としては低下傾向を示すなかで、年齢別のプロファイルと死亡確率上のジェンダー間不平等とが危機の 70 年代においてどのように変化したか、あるいはしなかったかが本論文のテーマである。

分析対象国はしばしば世界の最貧国の一つにあげられる地域であり、その歴史においてももっとも災禍に見舞われた時期が考察の対象である。国の統計制度とその産物である統計の精度とは理想的という状態からは程遠いが、幸いにして、独立以前の 1963 年から Matlab という地区において国際疫病研究機関 International Centre for Diarrhoeal Diseases Research, Bangladeshi（ICDDR, B）の援助と指導の下に始まった Demographic Surveillance のプログラムを通じて連続的にえられるデータが存在する。Begum 氏の研究の中核的部分は主としてこのデータを詳細に分析したものである。

本論文は、以下の 6 章から構成される。

Chapter 1	Introduction
Chapter 2	Literature review
Chapter 3	Mortality patterns and changing levels of mortality in Bangladesh
Chapter 4	Famine mortality and sex differential in rural Bangladesh: the case of the 1974 famine
Chapter 5	Life-table mortality and cohort survivorship
Chapter 6	Conclusion: changes and the persistent patterns

2．各章の内容

Chapter 1 において上記第 1 節で紹介したのと同様のことを述べたあと、Chapter 2 は研究史と論点のサーベイを行う。まず、植民地期の南インド以来の地域別人口変化と南インドの死亡パターンの特徴を簡単にみた上で、飢饉の人口学にかんする研究を点検する。この領域は、現代のアフリカとうにおける飢饉や世界各地における数知れぬ歴史上の飢饉を対象に非常に研究の蓄積が厚い分野であり、その成果は飢饉年における死亡率とその性・年齢別パターンの変化にかんする、一連の一般化命題としてすでに提示をされている。そのなかで本論文のテーマと密接にかかわる命題は、飢饉による死亡の絶対数では乳幼児と老年者とが多いものの、死亡率の平常年との比較でみると成人年齢層における死亡率の急伸と、女性の死亡よりも男性の死亡がやはり平常年との比較において急増することとが飢饉年を特徴づけというものである。南インドの歴史的飢饉についての研究はそれほど数が多くないが、1943 年のベンガル大飢饉や 1974 年のバングラデシュ飢饉については、すでにいくつかの優れた実証研究が存在する（たとえば、Tim Dyson や Arup Maharatna）。それらは全体としては一般化命題を支持するものであるが、Begum 氏は平常年のとり方の再検討、および 1 歳未満の死亡率と定義される乳児死亡率の月齢による細分割の必要を指摘する。それによって、これまで見過ごされてきた事実が明らかになる可能性のあることを指摘する。

Chapter 2 は、最後の節で、主要なデータ・ソースである Matlab 地域と Demographic Surveillance System（DSS）とについて説明を加えて終る。

Chapter 3 は、しかし、その飢饉死亡率の分析に入る前の準備として、生命表死亡率の水準とパターンとがどのように変化したのかを、1966 年から 2000 年にかんして全国および DSS データの双方によって検討する。検討の基準は Coale-Demeny のモデル生命表（および付随的に国連の途上国モデル生命表）である。これは〈北〉〈西〉〈東〉〈南〉という 4 つの地域モデルであるが、必ずしも地球上の地域に対応しているわけではなく、むしろ生態環境に規定された疾病パターンを反映した地域分けとなっている。実際、これまでは南インドであるので当然に〈南〉モデルという発想ある一方で、バングラデシュの現実には〈北〉あるいは〈西〉モデルが適合するという指摘もあった。しかし、著者の丹念な点検は Matlab のパターンが、乳児と比較して相対的に高い——とくに死亡率の水準が高いときには——幼児死亡率とその死亡原因中で下痢および腸炎の割合が高いことによって特徴づけられる〈南〉モデルの極端なケースであること、そして、全国データではパターン変化の兆候がみられるように思われるのにたいして、現在にいたるまで——死亡率水準の低下にもかかわらず——一貫してその特質を示し続けていることを指摘している。

Chapter 4 は本論文の核となる章の一つである。そこでは、Chapter 3 では意識的に考

察の対象とされなかった性別の死亡率パターンを分析の中心とし、1974 年に発生した大飢饉時における年齢別の死亡率がどのように推移したかを検討する。飢饉は 1974 年のサイクロンによってもたらされた不作に端を発し、死亡率自体は翌年の 1975 年まで上昇を続けたところの死亡危機であった。

この章において著者は、Tim Dyson が行った平常年との男女年齢階層別の死亡率比較（proportional rise の比較）を DSS データによって再検討する。再検討の要点の一つは基準とする平常年を変更したことである。Dyson は飢饉が終息した 1976 年を基準年としたが、著者はその年に無視できない規模のはしか流行があったことを指摘し、パキスタン時代ではあるが 1966-68 年を基準年とする。その結果によっても、一般化命題はほぼ妥当することが認められるのであるが、乳幼児期の性別パターンは予想とは異なって、女児に男児以上の死亡率急伸が観察される。この事実発見をうけ著者は、さらに月齢別の男女間格差推移によって検討する。この方法は、1951 年にフランスの Bourgeois-Pichat によって定式化された、しかしそれとは独立に 10 年以上も早く丸山博によって（若干異なったかたちで）定式化されたものである。著者は両者のうち丸山の方法を採用して、利用可能なデータをグラフする。月齢階層の区分が年次によって変わるため必ずしも比較は容易ではないが、飢饉の影響がもっとも深刻であった 1975 年には生後 1 ヶ月たつと直ちに女児の死亡確率が男児のそれを上回って上昇を始めたことが観察されたのである。通常、母親の免疫によって保護されている、生後 1 ヶ月までの新生児期をすぎると外部の影響を受けるようになるが、それでも意図的な女児への差別がないかぎり、乳幼児のあいだは生物学的にみて男児のほうが女児よりも死亡確率が高いのが一般的である。それゆえ本論文での発見事実は、社会的に根深い女児差別が、飢饉という極限状況の下では生後 1 ヶ月というきわめて早い時期から顕在化することを強く示唆する。

Chapter 5 では、Chapter 4 とは異なったアプローチがとられる。世代またはコーホート生命表（generation or cohort life table）の推計である。生命表は、通常、期間（period）ごとに作成される。各国の統計局が公表しているのも、単年次ごとの期間生命表である。しかし、バングラデシュの 1970 年代のように立て続けに災禍に襲われたような場合には、コーホートによってそれらの複合的影響が異なるはずであるにもかかわらず、その違いを明瞭に示すことが難しい。飢饉のような死亡危機は、それに遭遇したときの年齢によって死亡率の水準が大きく変わるからである。既存の期間生命表から世代生命表を推計することはテクニカルには困難を伴うが、著者は 5 つのコーホート（1966 年、1971 年、1974 年、1975 年、1976 年）について世代生命表を男女別に作成をした。たとえば、1971 年の分離独立戦争時に生まれたものは、3 歳のときに飢饉が起り、4 歳のときにその最悪の状態を経験し、1976 年にははしかの流行に遭遇した世代である。このコーホートを、たとえば飢饉死亡率がピークを迎えた 1975 年生れで翌年にはしか流行を経験したコーホートと比較すると、25-29 歳階層までの生存率が男女とも

1975 年コーホートよりも低かったことが確かめられる。それは 1970 年代の災禍をすべて経験したことの反映といえる。しかし、生存率の男女間格差に目を転ずると、誕生時に飢饉死亡率のピークを経験した 1975 年コーホートのほうが女児に不利であったことが判明する。これは、女児の場合、3-4 歳になってから飢饉を経験するよりも乳児のあいだに飢饉に遭遇したほうがその後の生存の確率が低下するということを意味する。

最後に、危機の年を生き延びた人びとについて、その後の 25 歳までの生存率に影響があったか否かを男女別に検討する。その結果は、やはり 1975 年生れのコーホートにかんして、飢饉の生き延びた人びとへのマイナスの影響が認められること、そのマイナスの影響は女児により大きかったことが確かめられるのである。

最後の Chapter 6 では、本論文における発見事実をまとめ、その解釈を提示する。すなわち、長期的にみれば死亡率水準の低下があったにもかかわらず、パターンの持続が認められる。生態環境に規定された年齢別の死亡パターンにだけではなく、ジェンダー不平等の問題は社会的に根深く、飢饉という非常事態のときにそれは顕著に顕れ、しかもその後の出生率低下のなかでも必ずしも消滅しなかったという解釈が提起される。最後に著者は、このパターンはインド亜大陸のなかでは、生態環境や農業経済上の相違にもかかわらず、北インドのそれと類同ではないかと示唆をして結語とする。

3．評価

発展途上国の人口学にはさまざまなタイプの研究があるが、本論文の強みは、第 1 に、ジェンダーというホットな問題を死亡統計の丹念な分析と世代生命表の推計という地道なアプローチによって解明しようとする姿勢にある。

第 2 に、ジェンダー不平等の問題を分析するために、飢饉という極限的な状況における死亡率のビヘイビアを観察する点も大きな特徴である。それも、通常の生命表から得られるような年単位の情報だけではなく、乳幼児については月齢単位のデータが得られるかぎりそれを分析する。このようなアプローチは資料に恵まれた場合は歴史人口学でも珍しくないが、バングラデシュでは 1974 年という、ごく最近にも激しい飢饉を経験したためにそのような分析が可能となり、それによって Dyson のような大家の結論に重要な修正を迫ることができた。

第 3 は、世代生命表の活用である。人口学において理論的には目新しくはないものの、それを現実の分析に利用した例はこれまでに非常に少ない。しかも、たんに推計することにのみ意味を見出すたぐいの作業ではなく、研究目的に沿った利用と魅力的な発見事実を提示したことを評価したい。

第 4 に、変化する水準にたいして変わらないパターンもあるのではないか、という発想にも独自性が認められる。南アジアは現在でも人口学的指標における男女間格差

が著しい地域で、その地域内でも北部は南部と比べてそれがとりわけ顕著といわれている。そのなかでバングラデシュが、南北どちらのパターンに属するかは興味ある問題提起である。そして、Begum 氏の観察結果は、いまだに人口転換が終了していない国にとっては切実勝つ現実的な問題を提起するものと思われる。

以上のような特徴をもつ本論文は、その発見事実と解釈の斬新さにおいて高い評価をうるに十分値する。しかし、問題がまったくないわけではない。第 1 は、Matlab という一農村地区のデータに大幅に依拠して分析を進めているにもかかわらず、その地域の特性が叙述において十分に意識されていない点である。同地区がバングラデシュの平均的な農村であるということは事実かもしれないが、その検証がややおろそかにされた感は否めない。

第 2 に、これは「強み」と裏腹の関係にあるが、女児への差別や男児選好の強さの背後にある要因、たとえば社会階層や世帯の経済状態などとの関連についてもう少し触れて欲しかった。現段階ではデータへのアクセスに困難が伴うようであるが、分析結果のより新鮮な事実発見へと到達するためにはぜひミクロデータの発掘が望まれる。この点は Begum 氏も、今後努力したいと述べているので、その成果に期待する。

第 3 に、ジェンダー不平等の文化にかんする南アジアの文脈でのバングラデシュの位置づけは魅力的であるが、本論文での掘下げは物足りない。この点も今後の分析に期待したい。

もっともこれらは、本論文の欠陥というよりは今後の課題というべきものである。全体として Begum 氏の博士学位請求論文は、確固とした問題意識と手堅い統計的実証とに支えられた優れた研究と評価できる。したがって、審査員一同は、所定の口述諮問の結果と論文評価とにもとづき、Mursheda Begum 氏に一橋大学博士（経済学）の学位を授与することが適当と判断する。

2008 年 4 月 9 日

審査員

（外部審査員）黒須　里美

斎藤　　修

（外部審査員）嵯峨座晴夫

佐藤　　宏

谷口　晉吉